

# マレーシアにある オーストラリアの大学で働く

モナッシュ大学マレーシア校ビジネススクール 准教授

**渡部 幹** (わたべ もとき)

本学に赴任して、3年が過ぎようとしています。私の所属するビジネススクールには、ニューロビジネス研究所と呼ばれる、経営学、心理学、認知神経科学を融合させたアプローチを持つ研究所があり、私はその副所長として研究を進めつつ、スクールの博士課程学生の研究管理のディレクターも兼任しています。

モナッシュ大学はオーストラリアに五つのキャンパスを持つほか、マレーシア、南アフリカ、インドにもキャンパスを持つ国際的マンモス大学ですが、どのキャンパスでも同じレベルの教育が受けられることをポリシーとしています。したがって、カリキュラムはすべてオーストラリア形式で、新年度は2月に始まり、12月に終わるというスケジュールとなっています。授業に関しては、本校で作られたシラバスに沿って、こちらの教授陣と本校の教授陣が連絡を取りあいながら教える仕組みとなっており、試験も採点基準もすべて統一されています。その厳しさは、米国の大学と相違なく、多くの学生がドロップアウトする反面、卒業する学生のレベルは大変高く保たれています。

マレーシアキャンパスにはビジネススクールの他、五つのスクールがあります。心理学部はスクール・オブ・メディスンに所属しているため、臨床やメンタルヘルス系の研究が盛んです。私が所属しているニューロビジネス研究所では、より基礎的な認知研究をマーケティングに応用するとともに、

職場で起こる社会心理学的な現象を神経科学的なアプローチで解析しようと試みています。

教員の業績についても、オーストラリアの基準で評価されます。3年単位で研究、教育、学内外へのサービスにおける個人的目標を定め、上司（通常は同じ学部のシニアの教授や准教授）と1年ごとに面談をし、評価をもらいます。

この中で最も比重の大きいものは研究ですが、研究の業績評価は、大きく分けて、論文発表、学会発表、著作活動の三つに分かれており、中でも論文発表は最も重要です。オーストラリアでは、Excellence of Research for Australia (ERA) という機関が学術誌のランキングをつけており、上からA\*, A, B, C, ランク外、となっています。これはほぼIFに対応していますが、分野ごとにランキングしているので、自然科学系雑誌のみが上位ランクを占める、といったことはありません。A\*とA評価の雑誌に3年で何本載せるかが評価の大きな基準です。

もちろん、教育では学生の評価点数とコメントが業績に大きく影響し、サービスは、各種委員会への出席、学外での宣伝活動への貢献などが業績と認められます。これらをすべて総合して最終評価が決まります。ここではテニュアトラックはなく、5年ごとの契約更新なので、評価が低い場合には契約更新できないこともあるようです。

このように業績評価の厳格さは、日本の大学ではなかなか見られない厳しいものですが、逆に言



## Profile—渡部 幹

1990年、北海道大学文学部卒業。2006年、UCLA大学院社会学研究科博士課程修了 (Ph.D.)。早稲田大学准教授などを経て現職。専門は社会心理学、社会神経科学。著書は『不機嫌な職場』（共著、講談社現代新書）、『つながれない社会』（共著、ナカニシヤ出版）など。

えば、頑張れば認められる職場と言えるでしょう。

以上はモナッシュ独自の評価方法ですが、それとは別にマレーシア政府が、大学教員のパフォーマンスを総合的に評価し、マレーシア内の大学をランク分けするための基準も存在します。それによって研究補助金の分配にも影響があるため、こちらも無視するわけにはいきません。海外の大学が他国にキャンパスを持つ場合、評価基準が複数生じるため、時折問題を起こすこともあります。

それにもかかわらず、マレーシアという、現在経済的にも社会的にもダイナミックに上昇している国には、ある種の「将来への希望」がみなぎっています。学生は将来の夢として、自分が起こしたいビジネスプランを述べたり、マレーシア社会をどうすべきかを熱心に語ります。ちょうど高度成長期時代の日本に似ているのではないのでしょうか。以上のような環境で研究できることも、こちらに来たメリットだと感じています。